

子育て支援と子ども観に関する調査研究

湯地 宏樹(比治山大学短期大学部)

研究の方向性について

子育て支援は、いうまでもなく、児童の権利に関する条約に基づいて、<子どもの最善の利益>を中心に置いたものでなくてはならない。

その国の宝である子どもの数が、わが国では年々加速度的に減少し、1989 年出生率(合計特殊出生率)が、ひのえうまの年(1966 年)の 1.58 を下回った(「1.57 ショック」と呼ばれる)頃から、国は本格的に少子化対策に着手してきた。1994(平成 6)年「今後の子育て支援施策の基本的方向について(エンゼルプラン)」、1999(平成 11)年「少子化対策推進基本方針(新エンゼルプラン)」、2004(平成 16)年「少子化対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について(子ども・子育て応援プラン)」が 5 年おきに策定されるなどした。

その結果、保育関連事業は飛躍的に拡大してきている。平成 6 年と平成 16 年を比較すると、保育所入所児童数は 159 万人から 197 万人と 37 万人増加し、うち低年齢児(3 歳児未満)は 41 万人から 62 万人と 21 万人増えている。さらに、延長保育実施保育所も 2,230 か所から 13,086 か所と 6 倍近くも増え、地域子育て支援センターは 236 か所から 2,786 か所と 10 倍以上も増えている。これらのほかにも、地域子育て支援センター事業、「生後4か月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)」、つどいの広場、家庭的保育(保育ママ)、ベビーシッター事業、ファミリーサポートセンター事業など、さまざまな子育て支援事業が展開・進行しているところである。

しかし、依然、保育所への待機児童の解消などの課題も残っており、今後もさらなる保育サービスの量的拡充も必要である。合計特殊出生率は、2005 年に過去最低の 1.26 を記録したが、2006 年 1.32、2007 年 1.34 と 2 年連続で上昇している。これまでの国の大規模な少子化対策がなければもっと低迷していたかもしれない。

少子化対策は、保護者のニーズが優先されがちであったが、「子育て支援」から「子育て支援」へ、質の保証の段階への転換が迫られているといえよう。事実、2010(平成 22)年「子ども・子育てビジョン」について～子どもの笑顔があふれる社会のために～では、今後の子育て支援の方向性について、生命(いのち)と育ちを大切にする、困っている声に応える、生活(くらし)を支えるという3つを大切な基本姿勢として、子どもが主人公(チルドレン・ファースト)、「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へ、生活と仕事と子育ての調和(ワーク・ライフ・バランスの実現)など、社会全体で子育てを支えるシステムの構築を目指している。

子育て支援は、<子どもの最善の利益>が基本理念にあり、それが保護者にとっても、保育者にとっても、地域社会の人々にとっても、共通に認識すべき、目指していくべき方向である。しかもそれは、国境や世代を超えて、世界の人たちが共通にもつ、子育て・子育ての普遍の原理だと信じるのである。

したがって、<子どもの最善の利益>を社会全体の共通認識とした「子育て支援」の視点と、それに基づいた「子ども観」の再構築が大切だと考える。

子ども観についての歴史は古いが、その問い直しについて、佐野(1980)は、おとなには「子ども像によって子どもをとらえようとする人(像派)」と「子ども観によって子どもをとらえようとする人(観派)」がいるという。「子どもそのもの」を観るためには、「子ども観」が大切だと強調する。それに対して、暗黙のうちに「子どもというのはこういうものだ」と、児童像とか子ども像とか、子どもを像(かたち)できめつけることを批判する。

詫摩(1981)は「おとなが考えている子どもの世界と、子どもが生活している実際の子ども世界の違いを、いろいろな角度から眺め、ありのままの姿をつまむ」ことが大切だという。「いい子に成長してほしい」という親の願いは当然だが、その前に、子どもを見る目にくもりがあってはならないというのだ。「子どもはこう思っているはずだ」と決めつけや、「すこしぐらいの要求はきいてやろう」という甘さが育児の落とし穴になるという。

浜田(2009)は、「問題としての子ども」よりも「存在としての子ども」を見つめ、子どもが生きる世界をそのままに捉えることはできないにしても、少なくとも子どもがその渦中から生きる世界について、その構図を描き、「子どもである」という条件を生きることを意味を考えるようとする。

このように、おとなの見ている子どもの世界と実際の子ども世界は違うという前提がある。佐野(1980)は、子どもを実体として確実にとらえるためには、過去・現在・未来という三点を有機的に関連させて、絶えず検証

しながら総合化する作業こそが必要であると述べている。すなわち、子どもが現在を生きているのを観て(子ども観)、自分の子ども時代を中心とする過去(幼時体験)を踏まえ、しかもそれらを否定の契機としなければ、子どもはようになっていくのか(未来)を想像するわけにはいかない」と説明している。現在へ執着すると、子どもを全面的に信頼し、子どものいいぶんは常に正しいと主張する「子どもベッタリ主義」に陥ったり、子どもは純真無垢なものだときめかかると観念的な性善説へと結びついたりする危険性を指摘する。また過去へ執着すると、幼時体験が鮮明かつ豊富であることはのぞましいのだが、おのれの幼時を都合よく郷愁的に回想しては、子どもの真善美を唱和する童心主義に陥ると警告する。つまり、「昔の子どもはよかった」「最近の子どもは・・・」などといってしまうおとなの先入観や価値観、いわゆる「子ども像」を批判しているのである。

しかし、子どもに対する見方には観派と像派の2つのタイプがいると主張するが、とくに、めざす子ども像を教育目標に掲げ、それを実践する保育・教育者にとっては、子ども観と子ども像の両面が混在し、その間で動的に揺らぐのが実際ではないだろうか。子ども観や子ども像は知識や経験によってその都度変化し、形成されていくものだろう。こうした問題意識で、大学生を対象として、とくに実習前後の子ども観を比較した研究も多い(大滝、2004;岡田、2006;谷口・長谷川・石井・泊・西田・豊永、2007;星野・日潟・吉田、2008;遠藤・後藤、2004年;吉田・佐藤、1991)。また、保育・教育者のもっている子ども観、子ども像、保育・教育観などのあらゆる観念形態(Belief System)に関する研究もある(森・大元・西田・植田、1984;森・大元・植田・西田、1985;森・植田・大元・西田・湯川、1986)。

そこで、本研究では、「子ども観」に着目し、①保護者②保育者③大学生④保育者志望学生⑤高校生などを対象として「子ども観」に関する調査を行い、それぞれの「子ども観」の違いや特徴などを明らかにし、「子育て支援」の課題や対策を明らかにしたい。また、いずれ親になるだろう、高校生・大学生を対象として、時系列的な調査を行い、「子ども観」の形成過程を明らかにしたい。

<引用・参考文献>

- ・ 遠藤芳子・後藤順子「小児看護学(幼稚園)実習の有効性の検討—実習前後の看護学生の子ども観と実習のとりえ方の変化から—」『山形保健医療研究』第7号、2004年、pp.33-44。
- ・ 浜田寿美男『子ども学序説 変わる子ども 変わらぬ子ども』岩波書店、2009年。
- ・ 長谷川真人・神戸賢次・小川英彦(編著)『子どもの権利条約』時代の児童福祉3 子どもの援助と子育て支援 児童福祉の事例研究 『ミネルヴァ書房、2001年。
- ・ 星野修一・日潟淳子・吉田圭吾「大学生における子ども観に関する一考察」『神戸大学大学院人間発達研究紀要』第2巻、第1号、2008年、pp.33-42。
- ・ 北野幸子・立石宏昭(編著)『子育て支援のすすめ 施設・家庭・地域をむすぶ』ミネルヴァ書房、2006年。
- ・ 森楸・大元千種・西田忠男・植田ひとみ「幼児教育における指導法と保育イデオロギー」『広島大学教育学部紀要』第1部、第33号、1984年、pp.87-96。
- ・ 森楸・大元千種・植田ひとみ・西田忠男「保育学生の Belief System」『広島大学教育学部紀要』第1部、第34号、1985年、pp.153-163。
- ・ 森楸・植田ひとみ・大元千種・西田忠男・湯川秀樹「保育者の指導意識の比較—経験・意欲・指導タイプ別考察—」『幼年教育研究年報』第11巻、1986年、pp.13-23。
- ・ 大滝まり子「教育大生の保育者観、子ども観」『北海道文教大学紀要』第28号、2004年、pp.105-114。
- ・ 岡田恵子「医療保育科学生の保育所実習前後の子どもイメージ、心理社会的発達の変化とこれらの関連性」『川崎医療福祉学会誌』Vol.16 No.2、2006年、pp.377-384。
- ・ 佐野美津男『人間選書 38 子ども学』農山漁村文化協会、1980年。
- ・ 詫摩武俊『子ども学入門 最新児童心理学に学ぶ知恵』光文社、1981年。
- ・ 谷口恵美子・長谷川桂子・石井康子・泊祐子・西田倫子・豊永奈緒美「子どもと養育者の継続的観察による学生の学習成果」『岐阜県立看護大学紀要』第8巻1号、2007年、pp.19-24。
- ・ 湯地宏樹「保護者とのパートナーシップ」『保育ライブラリ幼児教育の方法』(編著小田豊・青井倫子)北大路書房、2009年。
- ・ 吉田道雄・佐藤静一「教育実習生の児童に対する認知の変化 実習前、実習中、実習後の「子ども観」の変化」『日本教育工学雑誌』15(2)、1991年、pp.93-99。

資料:子ども親に関する予備的調査

調査対象:H短期大学の1年生と2年の学生203名

調査方法:2010年4月に次の質問項目について実施した。

- ①基礎調査(性別、学年、志望動機、中・高校の実習体験・職場体験などの有無など)
- ②子どものイメージに関する41項目(岡田(2006)と星野・日瀨・吉田(2008)の用いた項目を引用。)

表1 子どものイメージに関する項目の因子負荷量:回転後(プロマックス法)

変数名	活発性	純真性	従順性	自立性
活発な—活発でない	0.70	-0.03	0.01	0.13
明るい—くらい	0.62	-0.04	0.08	-0.01
生き生きした—元気がない	0.60	0.17	-0.02	-0.05
元気な—疲れた	0.58	0.13	-0.10	-0.04
意欲的な—無気力な	0.54	0.13	0.03	0.09
陽気な—陰気な	0.50	0.16	0.02	0.05
外交的な—内向的な	0.41	-0.11	0.35	-0.04
素直な—強情な	-0.02	0.60	0.00	0.13
親切な—いじわるな	-0.14	0.57	0.19	0.10
敏感な—鈍感な	-0.04	0.54	-0.23	0.30
よい—悪い	0.27	0.53	0.01	-0.08
かわいらしい—にくたらしい	0.31	0.51	0.07	-0.10
まじめな—ふまじめな	-0.06	0.45	0.17	0.06
好かれる—嫌われる	0.26	0.44	-0.04	0.16
あたたかい—つめたい	0.21	0.40	0.01	-0.06
愉快な—不愉快な	0.35	0.40	-0.05	0.14
正直な—うそつきな	0.11	0.40	0.08	-0.09
気持ちのよい—気持ちの悪い	0.23	0.38	0.07	-0.15
おとなしい—いたずらな	-0.07	-0.02	0.69	-0.17
落ち着いた—落ち着きのない	-0.03	-0.13	0.66	0.20
安定した—不安定な	0.18	-0.24	0.61	0.16
言うことを聞いてくれる—言うことを聞いてくれない	0.06	0.13	0.57	-0.24
静かな—うるさい	-0.23	0.13	0.57	0.19
従順な—わがままな	-0.02	0.26	0.50	0.07
きちんとした—だらしない	0.20	0.24	0.47	-0.01
扱いやすい—扱いにくい	0.09	0.08	0.46	0.06
行儀のよい—行儀の悪い	0.18	0.26	0.42	0.23
たくましい—弱々しい	0.27	-0.09	-0.03	0.65
たのもし—たよりない	0.02	0.07	0.05	0.57
理性的な—感情的な	-0.01	-0.30	0.23	0.50
強気な—弱気な	0.33	-0.08	-0.18	0.49
伝達力のある—伝達力のない	-0.06	0.16	0.13	0.49
理解力のある—理解力のない	-0.02	0.18	0.00	0.45
自立心のある—依存心の強い	-0.20	0.17	0.28	0.42
鋭い—鈍い	-0.10	0.32	-0.11	0.38
固有値	8.065	3.460	1.783	1.539
寄与率	19.67%	8.44%	4.35%	3.75%
累積寄与率	19.67%	28.11%	32.46%	36.21%

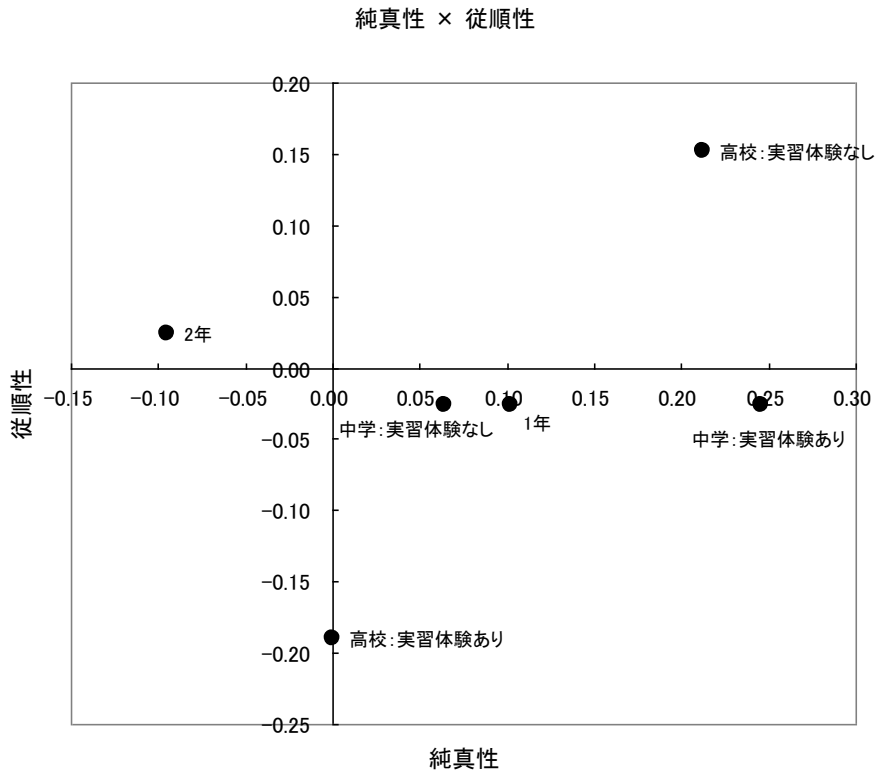


図1 純真性と従順性の因子得点のプロット(注:実習体験は職場体験も含む)

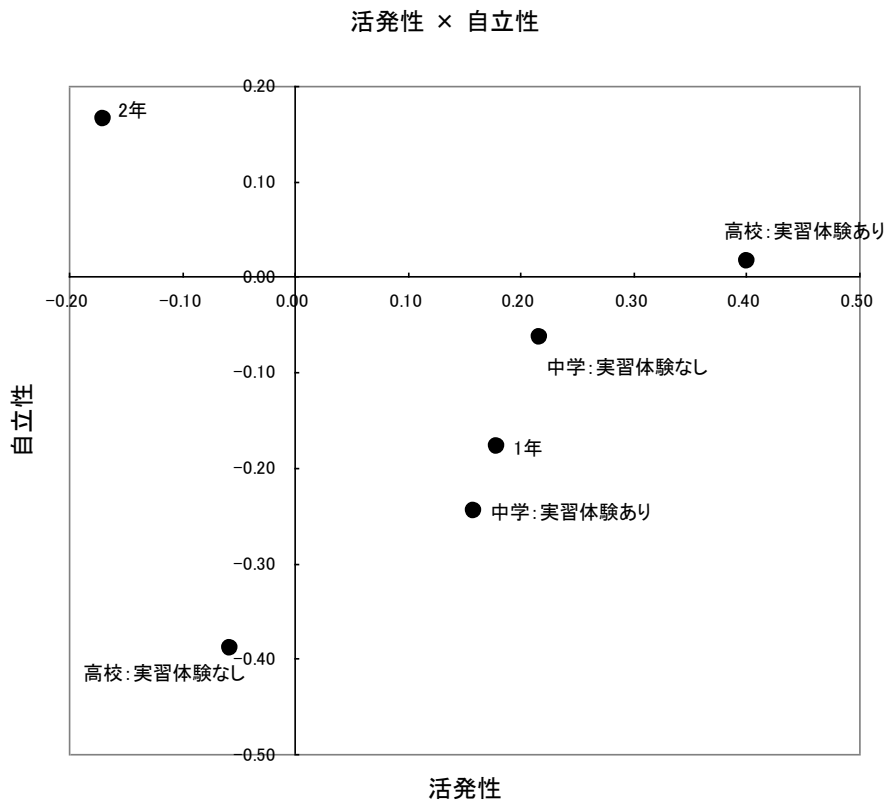


図2 活発性と自立性の因子得点のプロット(注:実習体験は職場体験も含む)